

死なない身体の喜劇 : Poe における笑いと無気味なもの

著者	西山 けい子
雑誌名	英米文学
巻	59
号	1
ページ	99-116
発行年	2015-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/14532

死なない身体の喜劇

——Poe における笑いと無気味なもの——

西 山 けい子

Synopsis: Almost half of Poe's tales are categorized as comedy and satire. Although most of Poe's topical allusions and satirical intentions in them seem to be lost to today's audience, some of those exaggerated and often absurd tales never stop haunting us. This paper examines how the funny and comical in those tales share uncanniness with the tales of fear and terror, and explores the possible link between the seemingly opposite genres. The tales examined are ones which deal with undead characters who survive eye-gouging, mutilation, hanging and beheading: "Loss of Breath," "A Predicament" and "The Man that was Used Up." Applying Alenka Zupančič's argument on comedy, we conclude that while something excessive and inhuman in comical characters fascinates us and gives us joy and pleasure, the same excess and inhumanness could be the cause of fear and the uncanny.

はじめに

Edgar Allan Poe は *Tales of Folio Club* として構想された最初期の短編から、1849年の死の数か月前の“X-ing a Paragrab”まで、諷刺、パロディ、ほら話、バーレスクの類に属する作品を書き続けた。広義のコメディであるそれらの作品は、有名な恐怖・ゴシック物語群の影に隠れて、読まれることも研究対象にされることもあまり多くはない。その理由のひとつとして、Poeの諷刺する対象が読者にはわかりにくいということが挙げられる。作品の発表された同時代においても、読者はPoeの意図を十分には理解しなかったようで、James Kirke PauldingはPoeのそれらの物語群を作品集として出版することを見送った。彼はThomas Willis White宛ての書簡で、見送りの理由として、それらが雑誌に発表されてからまだそれほど時間が経っていないことに加え、諷刺の対象が何であるかがわかりやすいとは言

えず、したがって、読者が楽しめないことを挙げている¹。Paulding は Poe が切れのあるユーモアや博識をもっと一般になじみのある主題——「一般庶民の欠点や短所、習慣や習俗の酔狂な点、とりわけ今日流行のイギリス文学の馬鹿げた気取りや誇張」——に向けるよう提案してみたいとしている。

諷刺は時代、社会を共有することでそのおかしみと毒が受容されるのであるから、時代を経て、その毒の意味が失われ、面白みが感じられにくくなるのは事実である。“King Pest”には当時のジャクソン大統領とその内閣へのあてこすりがあるとされるが、現代の読者が注釈なしにそれを読み取ることはほぼ不可能だ。また、Poe 自身の提唱する創作理論に呼応した、「単一の効果」を生むよう緊密に構成された作品に比べ、これらの喜劇的效果を狙う物語は作品としての出来がよいとは必ずしも言えない。David Galloway がペンギン版で Poe の滑稽・諷刺作品を集めた *The Other Poe* というコレクションを編んだとき、Patrick F. Quinn は書評で、「“Why the Little Frenchman . . .” や “Diddling” を我慢して最後まで読み通した人で、もう一度読もうという気を起こす人はいるのか？ Poe が書いたというのであれば、それらの作品は今関心と呼ぶだろうか？」と、こうした作品群の価値に疑問を呈している (13)。

しかしながら、Poe を全体としてとらえようとするときにそうした作品群の検討を避けるわけにはいかない²。Poe に特徴的な笑いは、たしかに Paulding が言うような「一般庶民の欠点や短所、習慣や習俗の酔狂な点」を面白おかしくからかうような「人間的な」笑いではない。死人と間違われたり、身体が切断されたり、目玉が転がったりする、「度を越した」笑いである。初期の研究において、Constance Rourke は Poe の笑いをアメリカ土着のユーモアの系譜に位置づける一方で、そこには収まらない Poe 独特の笑いを「ヒステリーの気味が混じった非人間的なもの」とし、喜劇と恐怖の中間に位置するようなグロテスクなものが用いられていることを指摘した (183)。これは Allen Tate の言う、「イギリス、アメリカのみならず、私の知る限りにおいてフランスを見渡しても、Poe ほど非人間化された人間 (dehumanized man) というヴィジョンを突き詰めた作家はいない」とい

う指摘とも呼応する (89)。Poe において、滑稽な味をもつ物語群において繰り返し出現する主題 (生きながらの埋葬, 死者の蘇り, えぐられる目, 切断される首, 分身, 狂気など) が, 恐怖の物語においてしばしば扱われる主題と共通することをわれわれはどう考えればよいだろうか。なぜ同じものをめぐって, 一方で恐怖が, 一方で笑いが導かれるのか。本稿では, 恐怖や無気味が, 笑いやユーモアとどのような関係にあるのか, 滑稽と無気味はどこでつながっているのか, といった関心のもとに 3 つの作品 (“Loss of Breath”, “A Predicament”, “The Man that was Used Up”)³ をとりあげて検討し, そこから, 「恐怖や無気味」と「滑稽や笑い」を結びつけるものについて考察する。

1

1) “Loss of Breath” (1835/1846)

ある男 (語り手, Lackobreath 氏) は, 新婚初夜明けに妻に罵声を浴びせようとして, 急に自分の息がなくなったことに気づく。当惑した男は, 妻にはその事実を隠して紛失した息を探しまわりますが, 寝室のどこにもそれは見当たらない。男は家を出て, 混み合った馬車に乗るが, 他の乗客から息がないことに気づかれ, 放り出される。死体とみなされて外科医に解剖されるが, 途中で逃れて窓から身を投げたところ, そこはたまたま通りがかった死刑囚輸送の馬車の荷台だった。囚人と間違われて絞首刑に処せられるが, 息がないので死ねない。死体として扱われて共同墓地に埋葬されるが, 幸いにも, そこで息を過剰にもった男 (隣人の Windenough 氏) をみつける。その男と取引して, Lackobreath 氏は無事に息を取り戻す。

事態の緊急性と術学的な語りのちぐはぐさに起因する笑いは別として, この物語のおかしみは, 息を紛失したために次から次へと苦境が襲うという, スラップスティックな展開にあるだろう。息はまるで所有物のように, 生きた人間から切り離されうるものとして扱われている。新婚の初夜明けに夫が妻を罵倒するという状況, 寝室で Windenough 氏から妻に宛てた手紙の束

がみつかるところから、一種の艶笑譚的な趣もある⁴。だが何よりも、生命が維持できないはずの状況下で事態が展開してゆく面白さがある。押しつぶされても耳や内臓を切除されても絞首刑になっても、Lackobreath氏は死ぬことがない。襲い来る苦境によって、Lackobreath氏の不幸は増幅されるが、それがさらなる笑いにつながっていく。息が失われているために「息の根を止める」ことができない不条理、〈死なない身体〉のおかしさである。

突拍子もない話で、Poeのコメディの中でも純粹に楽しめるもののひとつであるが、ここには、別の物語なら恐怖や不安をかき立てうる要素が滑稽な要素として内包されているのを見ることができる。そのうちのいくつかを確認しておこう。第一に、分身関係である。Lackobreath氏とWindenough氏は“William Wilson”のようなそっくりな分身ではなく、相互補完的な分身である。Lackobreath氏が小柄で肥満体型である一方、Windenough氏は長身に痩せ型、Lackobreath氏の失くした息をWindenough氏が偶然拾ってもっている。墓地に葬られたとき退屈しのぎに他人の棺の蓋を開けて死者についてあれこれと想像を逞しくしていると、Lackobreath氏はたまたま、どこか見覚えのある「死体」に出くわす。

“But here,” said I — “here” — and I dragged spitefully from its receptacle a gaunt, tall, and peculiar-looking form, whose remarkable appearance struck me with a sense of unwelcome familiarity — “here is a wretch entitled to no earthly commiseration.” (I: 71; underline added)

Windenough氏はLackobreath夫人の元・恋人あるいは現・恋人であることが仄めかされているため、“unwelcome familiarity”には相手への忌々しさが込められているととれるが、自己の分身に出会ったときの無気味さ（なじみのないものなのにどこか親しい感覚）と通じ合う。この分身は「影」ともつながりをもっている。「息」を失くす話は「影」を失くす話のヴァリエーションとも解釈されるが⁵、Lackobreath氏はその痩せた長身の「死体」

に向かって、「影に同情を寄せるなんてだれが考えるだろうか？(Who indeed would think of compassionating a shadow?)」(I: 71) と相手を腐している。

死刑囚と間違えられて絞首刑になるときの描写に、(最終の版では削除されているが) もともと不吉な表現が並んでいたことも注目される。⁶ ロープが首を絞めつけてくると、鼓動が早まり、鬱血が始まり、(“A Predicament” で首に時計の針が食い込んでくるときと同様に) 眼球が眼窩から飛び出ししかかる。決してそれは耐え難い感覚ではなかった、と語り手は述べる。

I heard my heart beating with violence — the veins in my hands and wrists swelled nearly to bursting — my temples throbbed tempestuously — and I felt that my eyes were starting from their sockets. Yet when I say that in spite of all this my sensations were not absolutely intolerable, I will not be believed. (I: 78; underline added)

さらに、死へと移行する直前の感覚とも言うべきものが語られる。そこでは遠い過去の記憶がよみがえり、その光景が走馬灯のように流れ出す。

Memory, which, of all other faculties, should have first taken its departure, seemed on the contrary to have been endowed with quadrupled power. Each incident of my past life flitted before me like a shadow. There was not a brick in the building where I was born — not a dog-leaf in the primer I had thumbed over when a child — not a tree in the forest where I hunted when a boy — not a street in the cities I had traversed when a man — that I did not at that time most palpably behold. I could repeat to myself entire lines, passages, names, acts, chapters, books, from the studies of my earlier days. . . . (I: 78)

ここには死を前にした多幸福感のようなものが流れているが、これらはむしろ恐怖の物語やシリアスな物語に適した箇所である。物語の滑稽味を損ないかねない細部であるため、のちの版で削除されたのも肯ける。

もうひとつ、考えようによっては無気味なのが、息を紛失して寝室を捜索したときに見つかった、奇妙な身体部品——入れ歯 1 セットにヒップ 2 つ、目玉が 1 つ——である。Lackobreath 氏の妻は John A. B. C. Smith 准将 (“The Man that was Used Up”) のようにサイボーグなのだろうか？ それとも…？⁷

2) “A Predicament” (1838) (“The Psyche Zenobia (How To Write a Blackwood Article)”)

Poe のコメディには一度読んだら忘れてしまう作品も少なくないが、なかには意識下に長く残るような作品もある。Daniel Hoffman はユニークな Poe 論 *Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe* において、思春期に彼につきまとったある場面について告白している。それは学校の教科書となっていた分厚いアンソロジーに収録されていたある作品に由来する。主人公だか誰だかが、高い時計塔に上り、時計の文字盤に空いた穴から首を突き出していると、そこに刻々と時計の針が近づいてくる。大鎌のようなその針は首に食い込み、はるか下の舗道にぼたりぼたりと血が滴る⁸。圧迫によって、やがて右の眼球が飛び出して転がり、その眼球が残った左の眼球を地面から見つめる。自分は苦境にある犠牲者でありながら、同時に別のところからそれを観察する傍観者でもある。——そんな悪夢のような物語を書くのは Poe 以外になかろうと思いつつも、Hoffman はそれがどの作品だったかなかなか見つけることができなかった。“The Pit and the Pendulum” の一節かと思ってみるが、そこには見当たらないのだ。結局それが “A Predicament” という作品だったとわかるのは、ずっとのちに、ガレージセールで Poe の全集一揃いを買ったときだった (7-8)。

“How to Write a Blackwood Article” の一部を成す “A Predicament” は、当時人気を博したイギリスの Blackwood 誌の作風を徹底してパロディ

化した、諧謔に満ちた作品である。だれにも経験できないような苦境を経験してそのときの感覚を記事にするのが売れる記事を書くいちばんの近道だとアドバイスを受けた **Psyche Zenobia** 嬢が、エディンバラの街を歩き、教会の尖塔に昇る。そのあと発生するのが **Hoffman** の悪夢にあるような事態である。センセーショナルな記事を書くために **Blackwood** 氏から授けられたアドバイスを忠実に、なおかつ、文章に箔をつけるためにちりばめられた引用がことごとく間違っているため、全体が誇張された悪ふざけの調子で一貫しているのが面白い点だが、ここには不安を誘う要素もまた出現している。まず **Psyche Zenobia** は、空高く聳える尖塔を目にしたとき、昇らずにいられない衝動に駆られる。

What madness now possessed me? Why did I rush upon my fate? I was seized with an uncontrollable desire to ascend the giddy pinnacle and thence survey the immense extent of the city. The door of the cathedral stood invitingly open. My destiny prevailed.
(I: 349; underline added)

ここで彼女を突き動かすのはまさしく「天邪鬼の精神」である。切り立った断崖の縁に立ち、はるか下を覗き込みたいという欲望と同じものがここには作用している。また、塔に足を踏み入れて螺旋階段を上ってゆくときの眩暈に満ちた感情も描かれる。旋回しては上昇していくその螺旋は、いつまでも尽きることがない。だが、そのてっぺんはもしかしたら、偶然か、あるいは故意に、とり外されているのではなからうか——そういう思いに彼女はとりつかれるのだ。

I thought the staircases would never have an end. *Round!* Yes, they went round and up, and round and up, and round and up, until I could not help surmising, with the sagacious Pompey, upon whose supporting arm I leaned in all the confidence of early affection — I

could not help surmising that the upper end of the continuous spiral ladder had been accidentally, or perhaps designedly, removed. (I: 350; underline added)

ここにあるのは渦巻き9の夢想と落下の夢想である。エディンバラの教会の尖塔は、螺旋階段と機械装置から成るピラネージの牢獄のイメージと重なっていて、ゴシックの無気味さを漂わせる。しかし、その無気味な感じはすぐに滑稽な調子に切り替わり、物語は進行する。鋼鉄の長針が首に食い込んだ **Psyche Zenobia** は、「完全な幸福」を感じ、さらには恐怖を感じる。目が飛び出そうとしているのだ。こぼれて落ちた片方の眼球と、そのあとを追うもう一方の眼球は、申しあわせているようで、いっしょになって転がっていく。ついに首が落ちて通りに転がっていったとき、奇妙な問いが **Zenobia** をとらえる——はたして頭が私なのか、胴体が私なのか。

この物語のおかしさは、こうした異常事態の無気味さや恐怖を括弧に入れる〈現状の肯定〉にあるだろう。センセーショナルな記事を書くことが第一目的であるため、生命の危機に瀕しても、事態を観察し記述することが優先され、生命体としての「死ぬ」という出来事は忘れられている。同じく切れ味鋭い大鎌が迫ってくる “**The Pit and the Pendulum**” (1842) であれば、語りを成立させるために主人公は間一髪で危機を免れる。この作品がコメディである所以は、間一髪という事態がそのまま通過され、語り手が自己の死を忘れているところだ。眼球が外れ頭部が切断された **Zenobia** の語りはどこから発しているかが不明であり、そこには奇妙な不安定さ、浮揚感がある。理論上は肉体的に存続不能な状態になっていながら、**Zenobia** が、頭部が自己なのか、胴体が自己なのか、という形而上的な問いに気をとられるところもナンセンスである。最後に「一卷の終わり (I have done.)」となるが、まさしく語りの終わり（現実的に考えた場合の）生命の終わりがずれている。崖の先で足場がなくなってもしばらくは歩きつづけ、足元が空虚だと気づいた瞬間に落下する漫画の人物と同様の滑稽さがある。

3) “The Man that was Used Up” (1839)

ブガブーおよびキカブー族インディアンとの戦場で勇名を馳せる特別進級の准将 **John A. B. C. Smith** は非の打ちどころのない人物だ。体格といい、物腰といい、声といい、歯といい、髪といい、髭といい、どれひとつとして完璧でないものはない。好奇心をかき立てられた語り手は、いったいどういう人物なのか知人たちに聞いて回る。みな一様に「不世出の勇者」「恐れを知らぬ闘士」「不滅の名声」「命知らずの猛者」と感嘆の言葉を繰り返すが、肝心の情報は得られない。当の **Smith** 准将とはいうと、彼は謙虚にもみずからの武勲については語らず、ひたすら偉大なる発明の時代である今日の機械テクノロジーを称えるばかり。業を煮やした語り手が准将の邸に訪ねていくと、早朝のことで、准将はまだ仕度ができていないらしい。寝室に通された語り手が目にしたのは、床に置かれた奇妙な大きい包みだった。包みの中から黒人の使用人に向けて指示をする声が聞こえる。取り出された脚や腕や肩が順番に組み立てられ、目が嵌められ、口蓋が収まると、ついには **John A. B. C. Smith** その人の姿が現れた。

この作品は当時の政治状況を諷刺するもので、**John A. B. C. Smith** は1813年のテムズの戦いで先住民の名高い酋長を殺し、自らも重傷を負ったという経歴の **Richard M. Johnson** 副大統領であるという説がある (**Whipple 81-95**)。しかしながら、そうした背景に通じていなくとも、アポロの彫像にも優る完璧な均整を称えられる人間が、そもそも人工的な部品の集積体だったという結末には、皮肉の効いたユーモアがある。「人間離れた」人間というのは、じつは人間ではなかった、という話である。語り手はこの神秘的な人物の背景を知ろうと知人を巡り歩くのだが、つねに同様の断片的贅辞を聞かされ、肝心の情報になると決まって邪魔が入り中断されるという点にも、コメディの常套である反復による誇張の面白さがある。

ところで、この作品でも、先の2つの作品と同様の身体損傷のモチーフが重要となる。**John A. B. C. Smith** は血なまぐさい戦場で四肢を切断され、頭皮を剥がれ、目玉をえぐられ、舌を切り取られたらしい。しかしそれにもかかわらず——**Psyche Zenobia** が首を切られ、**Lackobreath** 氏が解剖

されても自己を保っているように——John A. B. C. Smith も〈死なない人間〉なのだ。彼は初対面の語り手になぜか奇異な印象を与えるのだが、語り手はそれを「注目すべき何か」という以外には表現できない。彼を人間離れた人物にしている所以の「何か」があるのだ。それはちょうど *Ligeia* の神秘的な美について語り手が名指すことができないのと同じである。¹⁰

. . . I could not bring myself to believe that the remarkable something to which I alluded just now, — that the odd air of *je ne sais quoi* which hung about my new acquaintance, — lay altogether, or indeed at all, in the supreme excellence of his bodily endowments. Perhaps it might be traced to the *manner*; — yet here again I could not pretend to be positive. There was a primness, not to say stiffness, in his carriage — a degree of measured, and, if I may so express it, of rectangular precision, attending his every movement. . . . (I: 380; underline added)

彼の動きにはどこか整然とした堅さがある。それは機械的な堅さ、正確さと言っていいだろう。人間なのか機械なのかわからない、生命体なのか無機物なのかわからないという事態は、無気味なものの基本的状況である。知人たちが一様にほぼ同じ言葉で准将を褒め称えるのも、機械じみた感じを与える。語り手は、准将を訪問したときに、包みの中身が徐々に形を整えるのを目にするようになるが、語り手は包みの中からの奇妙な声の主を「得体の知れないもの (the nondescript)」(I: 387)、「もの (the thing)」(同)と呼ぶしかない。これはまさしく「怪物」を指す呼称である。

“Strange, you shouldn’t know me though, isn’t it?” presently re-squeaked the nondescript, which I now perceived was performing, upon the floor, some inexplicable evolution, very analogous to the drawing on of a stocking. (I: 387; underline added)

人間とは呼べないものから発せられる声は、催眠術を解かれた **Valdemar** 氏から発せられる声と同様の無気味さを帯びているのではないだろうか。

2

前節では、諷刺を含んだコメディに分類される 3 作品において、グロテスクで恐怖をかき立てるような事態が笑いを生んでいること、そこに不安に通じるような無気味の要素が含まれていることを確認した。死や身体切断のような、不安・恐怖をかき立てる主題が笑い・ユーモアの物語に現れるとき、それをおかしいと感じさせるメカニズムとはどういうものなのか。また、コミカルな物語に顔をのぞかせる不安や無気味の要素は何を表しているか。こうした問題意識のもとで、ここで改めて、3 作品から抽出できる笑いの要因について整理しておこう。(ここでも、笑いにおける、時事的な事象や特定対象へのあてこすりといった諷刺や皮肉の側面については脇におくこととする。)

①死なない身体

容易に気づかれる特徴だが、3 つの作品はいずれも〈死なない身体〉を扱っている。**Psyche Zenobia** は眼球が外れ、首が切り落とされても、観察する自己を保持している。**Lackobreath** 氏は息を紛失しても生き続け、はぐれてしまった息を取り戻すまで苦難を乗り越え奮闘する。**John A. B. C. Smith** は激しい戦闘で全身の器官を失っても、代替の人工部品によって見事に社交を続けている。登場人物の人間離れした不死身は「度が過ぎた感じ」を与え、笑いを生む要因となる。

②身体性、モノ性の強調

人間が身体にとらわれた存在であることは多くの喜劇の利用する根本原理である。どんなに高邁な精神の持ち主でもバナナの皮で滑れば、肉体をもったただの人間なのだ。**Poe** の作品においても、登場人物の身に降りかかる数々の災難が、彼らが身体をもつ存在であることを際立たせる。いくら博識

ぶりを発揮して形而上的思考を展開しても、術学めいてラテン語をちりばめでも、彼らは身体から解放されることはない。むしろ、それぞれの身体部位が、当人とは別個の独立したモノ性を保持していることが強調されるのが特徴だと言える。機械と生きた人間との混同・混乱も笑いの要因となる¹¹。

③アイデンティティの不確定性

取り違えや不一致は一般的な笑いの要因である。3作品においても、自分(あるいは相手)は何者なのか、ということの不確定と混乱が笑いの要素の一部を構成している。“The Man that was Used Up”においては、John A. B. C. Smithはいったい何者なのかというのが中心的主題だが、語り手についてもそのアイデンティティは不明確である。(語り手はSmithによって“Mr. Thompson”と呼ばれるが、それは語り手の名前ではない。)“A Predicament”においては、首と胴体のどちらが「私」なのか、という自己のアイデンティティの問題が提起されるほか、Psyche Zenobia自身が名前を呼び違えられることへの不満を最初に口にしている(“I am *not* Suky Snobbs.”)。“Loss of Breath”ではLackbreath氏は自分を生きた人間と扱ってもらえないだけでなく、死刑囚とも間違えられる。3作品に共通して、アイデンティティの不確定、取り違えのモチーフが使われている。

④言語の比喩性と原義の浮上

3作品とも、比喩的・慣用的意味をもつ表現が字義通りの意味となって立ち上がってくるのが確認できる。“A Predicament”では、「時の大鎌(Scythe of Time)」がまさしく物理的に近づいてくる。“Loss of Breath”では、「息を切らす(“I am out of breath.” “I have lost my breath.”)」という日常表現が、字義通りの出来事として主人公を襲う。“The Man that was Used Up”では、“used up”という慣用表現(当時は「話題になる、噂になる」の意味でよく使われた)が、「精根尽きる、使い尽くされる、用済みになる」の意味をもたらす。「目(eye)」を使った「なんとまあ!」という語り手の感嘆表現(“my eye!!”)が、あとにつづくSmithのせりふによって、文字通り「眼球」の意味に転位する箇所などもおかしみを生じさせる(“O yes, by-the-by, my eye — here, Pompey, you scamp, screw it in!”)。こうした

ところに、言語が慣習から離脱して自由になる快感が生じている。このほかにも、純粋な言葉遊びの楽しみ、洒落やジョークは、これらの作品の基調をなしている。

⑤ 固有名とその一般化

人物の名づけの法則は悲劇と喜劇では異なる。¹² Poe においては、“Ligeia” “Usher” “Lenore” など、言い換え不能な固有の名前がロマン主義的人物であることを示しているが、コミカルな物語においては、名前が一般名詞的な意味合いをもつ。Psyche Zenobia は Suky Snobbs という名前と間違われることを心配しているし、Lackobreath 氏というのは即物的な名づけである。John A. B. C. Smith というのも、ごくありきたりの名前に A. B. C. がついたもので、個別の人間というより記号としての無機質な人間であることを意味している。このことは、これらの人物が類型であることを示しており、苦境に陥る人物を扱う笑いに必要な距離感を生むのに役立っている。

さて、これらの要素はどういう点において無気味さにつながりうるだろうか。上記の 5 つの特徴は、文脈が異なればそれぞれ無気味の要素にもなりうることは、Poe の別の作品と照らし合わせることによって理解されるだろう。①〈死なない身体〉は、Poe が “The Fall of the House of Usher” “The Premature Burial” 等で扱った、生きながらの埋葬の主題と共通する。②身体性、モノ性の強調については、“The Tell-Tale Heart” の目や Berenice の歯、Valdemar 氏の身体との関連性が思い浮かぶ。③アイデンティティの不確定性については、ただちに “William Wilson” が浮かぶだろう。④言語の比喩性と原義の浮上については、“House of Usher” が屋敷と家系をとともに表していること、“fall” が物理的崩壊と家系の終焉を意味していることを思い出そう。⑤の固有名とその一般性については、たとえば “Pluto” という猫はその名によって冥界の王たる未来を予兆し、“Red Death” は疫病の名前、かつ、その化身であった。これらは一種のアレゴリー的な作用をもつ名前である。

3

無気味と笑いに関係があることはかねてから指摘されている。よく知られるところでは、**Freud** が「ユーモア」(1928)の冒頭で挙げる「死刑台のユーモア (gallows humor)」がある。これは絞首台に引かれて行く罪人のエピソードである。刑の執行が月曜のことで、道すがらこの罪人が「ふん、今週も幸先がいいらしいぞ」と言ったとすれば、そこにはユーモアが生まれる。**Freud** によれば、死や病気や戦争などの暗い話題に関するユーモアとは、超自我が苦境におかれた無力な自我に「そんなことは何でもないよ」と励ます機能をもつ。「無気味なもの」(1919年)においても **Freud** は、無気味なものが笑いの対象にもなりうる例を記している。フィクションの例として挙げられているのは、**Mark Twain** が旅先の宿の真っ暗闇で何かを探そうとして決まって同じ家具にぶつかるといふ誇張されたドタバタ風のユーモア (*A Tramp Abroad*, 1880)であり、**Oscar Wilde** の *The Canterville Ghost* の愉快的幽霊である (**Freud** 344, 356)。

無気味なものが笑いに通じているということは、現実でもフィクションでも、実例としてはよく知られており、先にみたように **Poe** においてもそのつながりが指摘しうる。しかしながら、どういうところで両者はつながっているのかということについては、十分な議論はなされていないのではないだろうか。**Freud** の言う超自我の機能ということで説明がつくケースもあるが、そうではないケースもありそうだ。少なくとも、**Poe** の3作品にみられるような笑いとの無気味の関連は、そのような説明では理解しきれない。この点に関しては、**Alenka Zupančič** の議論に触発されるところが大きいので、**Zupančič** の喜劇論から関連する部分を簡単に紹介しておこう。

「精神的なものが本義となっているのに、人物の肉体的なものに我々の注意を呼ぶ一切の出来事は滑稽である」という **Bergson** の命題 (『笑い』, 54)にあるように、人間は神ではなく、「ただの人間にすぎない (“**Man is only man.**”)」(欠点や弱点をもっている) というのが笑いの源であると一

一般的には理解されている。だが、Zupančič はそれを単純すぎるとし、それに加えて逆の説も提起する。喜劇や喜劇的なものが教えているのは、「人間はけっしてただの人間ではない」ということ、「人間の有限性は、自身の身の丈に合わない、その有限性に見合わない情熱によって、大いに浸食されている」ということではないのか——じつは笑いとは、「人間はただの人間ではない（“A man is not a man.” “A man is inhuman.”）」ところにも生じるのではないかと言うのである（49）。もちろん通説のように、人間がただの人間に過ぎないというところに笑いがあるのはたしかだ。肉体を離れた高い精神性をもつはずの人間が、肉体をもつ人間の限界を露呈するというのは滑稽である。だが、それとは逆に、肉体をもつ存在である人間が肉体の限界を突き抜けてしまうところにも笑いは生じる。喜劇の人物はたいてい度を越している。過剰である。死んでいるのにびくびく動いてしまう。喜劇的人間がもっている欠点や弱点、途方もなさというのは、彼らが「ただの人間ではない」ところにも——彼らが自分自身を超えてしまっているところにも——あるのである。

Zupančič によれば、真の喜劇的精神とは、「無限性の物理学（physics of the infinite）」である。一般に人間は有限の存在で、限界（精神分析的観点からいうと、欠如、去勢）を受け入れて生きていとされるが、われわれの有限性は常にすでに「失敗した有限性」である。つまり、人間の有限性には穴が開いているのである。有限性から洩れ落ちたものは Lacan によれば「対象 a」と呼ばれるが、この「失敗した有限性」の隙間を通して、人間を超えたものが飛び出してくる、それが喜劇の糧になるのである。

Zupančič のこの説は、先に論じた Poe の作品にみられる〈死なない身体〉の笑いを説明する議論として有効と言えないだろうか。異常な出来事、危機的な出来事が起こっても、登場人物は基本的にはそれを受け入れる（息の紛失、時計の針による斬首、戦闘による致命傷）。これらの人物はなぜそうなったかという因果律には無関心で、継起する現実の事象への対応に気をとられる傾向があり、結果として、楽天的であり、自分が死んでいることにもうっかりして気がつかない。こうして、「生きている死体」という余計な

もの、過剰なものが世界内に平然と居座る。欠如すべきものが欠如していない、「欠如の欠」が受肉したかたちをとるのが、死体にまつわる滑稽さなのである。

欠如すべきものが欠如していないという事態は、無気味なものが生じる要件でもある。“William Wilson”では、同名のライバルは、語り手の Wilson に名指すことのできない何かが付加加わった存在だ。そういう過剰な何かの接近は不安の念を呼び起こす¹³。一方、喜劇の場合、その余計なものをあたかも当然のように受け入れるところにおかしみが生じているのである。

結びにかえて

Poe における喜劇的作品、ユーモアに分類される作品のうち、時代性や社会性を括弧に入れて読んでも十分面白いと思える 3 作品をとりあげ、その笑いの特徴と無気味さの共存を指摘した。Poe において、生きながらの埋葬、臨死の感覚、死後の意識といった恐怖やグロテスクの物語に頻出する主題が、ユーモアのある作品にも使われていることを確認し、無気味さと笑いの関係について、Zupancić の議論を援用して考察した。〈死なない身体〉とは、世界内にありえないものが世界内に入ってくる、その過剰性に由来する笑いであると考えることができる。身体という限界をもった「ただの人間」ではなく、身体を超えた「超人間」が生む笑いを Poe 作品の中に指摘できたと思う。

Poe の笑いには同時代の雑誌や作家を揶揄するものが少なくない。本稿で取り上げた作品にも、そういう辛辣な笑いや侮蔑的な笑いは含まれている。だが、Poe のコミカルな作品が時代を超えて読み継がれるとすれば、それはこうした、「ただの人間」を超えた、超人間的な笑いを生じさせるものではないだろうか。それはさらには非人間的な笑い、まったくの非-意味の笑いにまで至る。Poe の笑いは、人と人をつなげる機能をもつような、共感を呼ぶ笑いではなく、人間が人間を離脱するような、反ヒューマニズムの笑いと言えるかもしれない¹⁴。

注

1 *The Poe Log*, 193. 「さまざまな種類の知識を一定程度要求しているが、読者はそれらになじみがなく、したがってジョークを楽しめない」「料理は一般読者の口には高級すぎる」。

2 喜劇・諷刺の作品群に関してもいくつかの重要な議論はなされてきた。主な文献については、Stuart Levine and Susan F. Levine 参照。David S. Reynolds によるアメリカの言語の「カーニバル化」の議論も興味深い (441-83, 524-33)。

3 “The Psyche Zenobia (How To Write a Blackwood Article)” の一部を成すが、ここでは独立して扱うものとする。

4 Marie Bonaparte はこの作品を非常に重視し、多くの紙数を割いて詳細に分析している。それによれば、「息」とは男性の性的機能であり、この物語は Poe の性的不能を扱っている。

5 この物語のソースのひとつとして、Mabbott は Chamisso の *Peter Schlemihl* (「影をなくした男」, 1814) を挙げている (I:52)。これは魂を売る話とも結びつくため、Marie Bonaparte は Lackobreath 氏が息を取り戻す最後の取引の場面に立ち会う「第三者」を「悪魔」と解している (404)。

6 初出時 (1835 年) の 26 パラグラフから、1846 年の版では 6 パラグラフに圧縮されている。

7 Mrs. Lackobreathn の正体は、Jonathan Swift の謳う娼婦 Corinna (“A Beautiful Young Nymph Going to Bed,” 1734) と同じかもしれない。Corinna は、夜更けて帰館すると、鬢、義眼、つけまつげ、入れ歯、胸の詰め物、人造ヒップを外し、醜悪な姿をさらす。

8 Poe の作品では「血が滴る」描写はない。そこまで描くとグロテスクの度合いが行き過ぎて、滑稽味が損なわれてしまうだろう。Hoffman はいわば、明示的に書かれていない恐怖とグロテスクの側面を意識下に受け止めたと言えるだろう。

9 池田美紀子はすぐれた比較文学研究において、この箇所を *Confessions of an English Opium-Eater* (1821) の一節と比較して興味深い考察を行っている (355-56)。

10 “The Man that was Used Up” の冒頭は “Ligeia” の冒頭とよく似ていることが従来から指摘されている。

11 これは、自動人形など無気味なものの主要な主題でもある (Freud 「無気味なもの」)。

12 固有名と喜劇・悲劇の関係については Zupancič の議論が参考になる (35)。

13 拙論「見つめ返すまなざし——アウラ、プンクトゥム、対象 a」参照。

14 過剰さがさらに先鋭化した作品も Poe にはある。活字が足りずに x ばかりになる意味不明の記事 (“X-ing a Paragrab”) のように、不条理で非-意味である笑いについて、柄谷行人は坂口安吾との関係で示唆に富む視点を提示している。(柄谷

行人『坂口安吾と中上健次』, 講談社文芸文庫, 2006.)

参考文献

- Bergson, Henri. *Le Rire: Essai sur la signification du comique* (1900). (『笑い』, 林達夫訳, 岩波文庫, 1991.)
- Bonaparte, Marie. *The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation*. Trans. John Rodker. London: Imago, 1949. 373–410.
- Freud, Sigmund. “Das Unheimlich” (1919). (「無気味なもの」『フロイト著作集 3 文化・芸術論』, 高橋義孝訳, 人文書院, 1969.)
- . “Der Humor” (1927). (「ユーモア」『フロイト著作集 3 文化・芸術論』, 高橋義孝訳, 人文書院, 1969.)
- Galloway, David. Ed. *The Other Poe: Comedies and Satires*. Baltimore: Penguin Books, 1983.
- Hoffman, Daniel. *Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe*. New York: Avon Books, 1972.
- Levine, Stuart and Susan F. Levine. “Comic Satires and Grotesques: 1836–1949.” *A Companion to Poe Studies*. Ed. Eric W. Carlson. Westport Connecticut: Greenwood Press, 1996.
- Poe, Edgar Allan. *Tales and Sketches*. Vol. I: 1831–1842. Ed. Thomas Ollive Mabbott. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 2000.
- Quinn, Patrick F. “Poe’s Other Audience.” *Poe Studies* 18.1 (1985): 13–14.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge: Harvard UP, 1988.
- Rourke, Constance. *American Humor: A Study of the National Character*. New York: Harcourt, Brace & Co, 1931.
- Tate, Allen. *The Forlorn Demon: Didactic and Critical Essays*. Chicago: Regnery Publishing, 1953.
- Thomas, Dwight and David K. Jackson. Eds. *The Poe Log: A Documentary Life of Edgar Allan Poe 1809–1849*. Boston: G. K. Hall & Co, 1987.
- Whipple, William. “Poe’s Political Satire.” *University of Texas Studies in English* 35 (1956) : 81–95.
- Zupančič, Alenka. *The Odd One In: On Comedy*. Cambridge: MIT Press, 2008.
- 池田美紀子. 『夏目漱石——眼は識る東西の字』, 国書刊行会, 2013.
- 西山けい子. 「見つめ返すまなざし——アウラ, プンクトゥム, 対象 a」, 『Becoming』 vol.21. BC 出版, 2008.